

## ブルーノ・タウトと秋田 — 『草園』同人とのつながりを中心に —

丸谷 仁美\*

### はじめに

本稿をまとめるきっかけは、2025年9月頃の新潟大学名誉教授和泉薫氏からのレファレンスであった。内容はブルーノ・タウトの『日本美の再発見』の中に書かれている「追分の雪室」の場所についてである。その記述は1935年5月26日に秋田を旅した際の短い記録であるものの、長年雪室の研究に携わっている和泉氏の興味をひいたのであった。当初、90年ほど前にタウトが見た雪室の場所を確認できるか半信半疑ではあったが、さまざまな方に尽力いただき、雪室（正確には氷室）の場所を確認することができた。

雪室を見た日、タウトは勝平得之とともに現在秋田県立博物館分館となっている旧奈良家住宅（重要文化財）を訪れている。

本報告では、当時タウトと得之の歩いた追分駅から旧奈良家住宅までの道と、タウトの訪問が秋田の人々に与えた影響について検証することを目的とする。従来の研究ではタウトを案内した勝平の功績に目を向けられがちであったが、当時秋田で刊行されていた雑誌『草園』（のちの『叢園』）の同人達の協力があつたことが分かった。そこで本稿ではタウトの旅に関与した人々、特に『草園』同人との関わりについて整理し、タウトの秋田の旅について考えてみたい。

### 1. タウトと東北の旅

#### 1) ブルーノ・タウトについて

ブルーノ・タウト（1880-1938）は東プロイセン、ケーニヒスベルク（現ロシア領）に生まれた。ドイツ建築界の中心的人物であったが、ナチスの弾圧を避けるため、ナチス政権成立直後の1933年、生涯をともにしたエリカ・ヴィッティヒ（1893-1975）とともにヨーロッパ諸国を探訪後、来日した。日本では群馬県高崎市少林山達磨寺（洗心

亭）に居住し、仙台の商工省工芸指導所（34年3月まで）及び群馬県立工芸所の嘱託をつとめる。日本滞在中の3年余りの間、タウトは工芸品のデザイン指導を行ったり、日本の建造物や文化について執筆したりした。

1936年にトルコ共和国に招聘され、10月に離日。イスタンブール芸術大学建築学科長などをつとめ、多数の建築物を手がけた。しかしながら2年後の1938年にイスタンブールで客死した。58歳であった<sup>(1)</sup>。

#### 2) 東北の旅の目的

タウトを日本に招聘したのは建築家であり、ベルリンで建築学を学んだ上野伊三郎（1892-1972）と、当時上野が所属していた日本インターナショナル建築会である。日本インターナショナル建築会は社会情勢やその他の影響から、タウトが来日した年に活動停止している。上野やタウトの建築の仕事は減少したものの<sup>(2)</sup>、上野はタウトの通訳等をつとめることで関係を深めていった。そしてタウトは、日本滞在中、執筆活動に専念することになる。

今回取り上げる秋田の旅は、出版計画が進められていた“HOUSES AND PEOPLE OF JAPAN”（邦題『日本の家屋と生活』）を執筆するための調査旅行である。1935年5月16日（木）から29日（水）のほぼ2週間、タウトは上野を案内人兼通訳として、京都から岐阜、飛騨高山、富山、新潟、佐渡、山形、秋田、青森の日本海側を北上した後、宮城、東京で旅を終える。この旅日記は「飛騨から裏日本（旅日記抄上・下）」、「奥の細道」というタイトルで『日本評論』に掲載された。翌年、小正月行事を見るために秋田を訪れた「雪の秋田（後に『冬の秋田』と改題）」（『文藝春秋 15（3）』1937年3月1日刊）をあわせ、1939年に『日本美の再発見』（篠田英雄訳）として岩波新書より刊行された。

タウトは日本滞在中、ところどころにスケッチ

\*秋田県立博物館

をはさみこんだ克明な日記をしたためていたという<sup>(3)</sup>。訪れた土地の様子を詳細に記し、時に辛辣な意見などを交えたそれは、秋田の旅の記述でもしばしば見られる。また、タウトの眼は建築だけでなく、土地の風俗や慣習などにも向けられている。当時の生活風景が克明に記されたタウトの記述は貴重なものであり、現在でも取り上げられるのはこうした意味もあろう。

## 2. 秋田市の旅（1935年5月24日から5月26日）

### 1) 秋田市へ

ここからはタウトが記した秋田の旅について見ていきたい。詳細については加藤隆子氏の著作や秋田県立近代美術館の展示図録<sup>(4)</sup>などで既に触れているものの、いずれも勝平得之を中心としたものである。そのため今回はタウトの日記や、当時タウトに関わった秋田の人々の記述を踏まえて再検証したい。

東北地方の旅の途中、タウトが上野とともに秋田市を訪れたのは5月24日の日没後であった。駅長にすすめられて、当時土手長町末丁（現中通3丁目）にあった石橋旅館に宿泊する。

石橋旅館には勝平得之の版画と絵葉書が並んでいた。以前銀座の平井版画店で勝平の版画を見ていた上野は、当時全く面識がなかったにもかかわらず、勝平に秋田の案内を頼もうと思いつき、勝平宅へ手紙を送ったのだ。勝平自身、手紙に書かれていた見知らぬ「ブルーノ・タウト、上野伊三郎」の署名を見て、外国人に会って話をする億劫さを感じたが、銀座の版画店で見たという自身の版画を頼りにわざわざ連絡をしてくれ、「むげには断り得なかったので」翌朝石橋旅館に出向くことにしたのであった<sup>(5)</sup>。

25日、勝平は石橋旅館を訪れた。そして上野の通訳によって、群馬県知事から秋田県知事宛の紹介状を出したが何の効力もなかったこと、旅館の都合で本日はここを引っ越さねばならないという話を聞いた。タウトは常々「日本滞在中は誉めあげて置いて帰国してから悪口を書くやうなことは好ましくないから私は思った通りのことを言ふ」<sup>(6)</sup>と話しているとおり、この内容は、25日

のタウトの記録にも記されている。そして、秋田県知事の一件は後に少なからず波紋を呼ぶことになる。

この日は珍しく晴れた日<sup>(7)</sup>、勝平はタウトらを秋田市内に案内した。県庁や物産陳列館、「当時の大町那波質店（ママ）、辻兵呉服店から三田鉄砲店の土蔵造り、田中醤油店の内外、茶町那波紙店<sup>(8)</sup>」などを見、稲福食堂で昼食をとった後、午後は自動車で秋田市添川湯沢へ行き、豪農の家を訪れている。その後勝平宅で版画を見たり、冬の生活や正月行事の話について語り合ったりしたという。この日タウトは勝平に、後日刊行予定の“HOUSES AND PEOPLE OF JAPAN”の口絵を依頼している。

「質素な旅館であっても川に面したところをこのむ」とタウトに言われ、勝平は秋田市保戸野通町の金谷旅館を紹介した。この旅館と女中のおときさんが気に入り、タウトは翌年の秋田の旅にも金谷旅館に宿泊している<sup>(9)</sup>。

### 2) 追分から奈良家住宅へ

5月26日。この日も晴れて、タウトと上野、勝平は車で秋田から追分に向かった。

この時の様子は『草園』の同人であり、追分で酒造会社を営んでいた近藤萍悠（本名：兵雄1904-1975）が『草園』誌や『秋田魁新報』に記している。タウトの日記と勝平、近藤らの記述から、追分駅から奈良家までの道のりを辿っていきたい。

タウトと上野を連れて勝平が近藤宅を訪れたのは午前中であった。「版画家の勝平得之氏が變な外国人を連れて、私を訪ねて来た」と近藤は記している<sup>(10)</sup>。その時は有名な建築家である「ブルーノ・タウトと上野伊三郎」と言われてもピンとこなかったが、勝平から「小泉の奈良家」の場所を聞かれて道順を説明した。その後2、3時間ほどして3人は再び近藤宅を訪れ、汽車の時間まで1、2時間近藤家で休憩を取っている。昼過ぎであったが、昼食がまだだというので、駅前の旅館から蕎麦を取り、タウトは卵入りの蕎麦を美味そうに食べたという。この時、近藤は手元にあった『草園』をタウトと上野とに渡し、原稿を依頼して別

れた。

追分駅から分館旧奈良家住宅までは20分ほどの距離である。近藤家に戻るまで2、3時間を要したとすると、周辺地域と奈良家住宅見学に十分な時間をあてていたことが推測される。

当時の地図や聞き取りなどから、タウトらが辿った奈良家までの道を考察したい。

図1～2は追分駅から奈良家住宅までの当時の道と、追分周辺の住宅の様子である。近藤が営んでいた酒造会社は、駅周辺の店舗が並んだ場所から少し離れた国道沿いにある。タウトの日記にある追分付近の「旅館に附属している料亭」は、駅前に並んでいる2軒の旅館と思われ、当時は食堂があったという。このどちらかで近藤は蕎麦を注文したことになる。

国道沿いの道についてタウトは「昔ながらの街道に沿って巨大な松の並木があり、それが一定の風向きに従って一様に傾き」と記している<sup>(11)</sup>。追分駅周辺は国道沿いに松並木が広がり、国道と鉄道とをはさんだ土地も松林であった。さらに線路の両脇にも防風林として松の木々が植わっており、奈良家までの道は松林に囲まれていたと思われる。

26日の日記の冒頭に「寒中に雪を蓄えておく小屋」のことが記されているが、今回確認できた氷室の場所は駅から1kmほど北の方向にある。日記を時系列に辿れば、タウトが見た氷室は別の場所にあったとも考えられるが、原文では単語の羅列のみであったり、時間が前後する場合などがあつたりするため、訳者による補足などが行われたことを考えると<sup>(12)</sup>、この氷室を見た可能性も否定できない。

現在、氷室跡は国道7号線沿いの牛坂地区に残されている。約10m×11mの大きさで、約1mほど地面が掘られた造りである。この氷室は昭和20年代までは使用されていたと思われ、男湯の氷を貯蔵していたという。「大きな藁葺屋根、棟の上には長い棒がかかっている。壁はない」とタウトの日記にはあるが、当時を記憶している方の話からも、氷室は丸太を三角に組み上げた上に藁か茅を掛け、長い棒で丸太を押さえる簡易な作りであったといい、タウトの記述とほぼ一致する

(図3・写真1参照)。この氷室の持ち主は不明で、恐らく氷は自家用ではなく、商店で使用したものであるとのことであった。

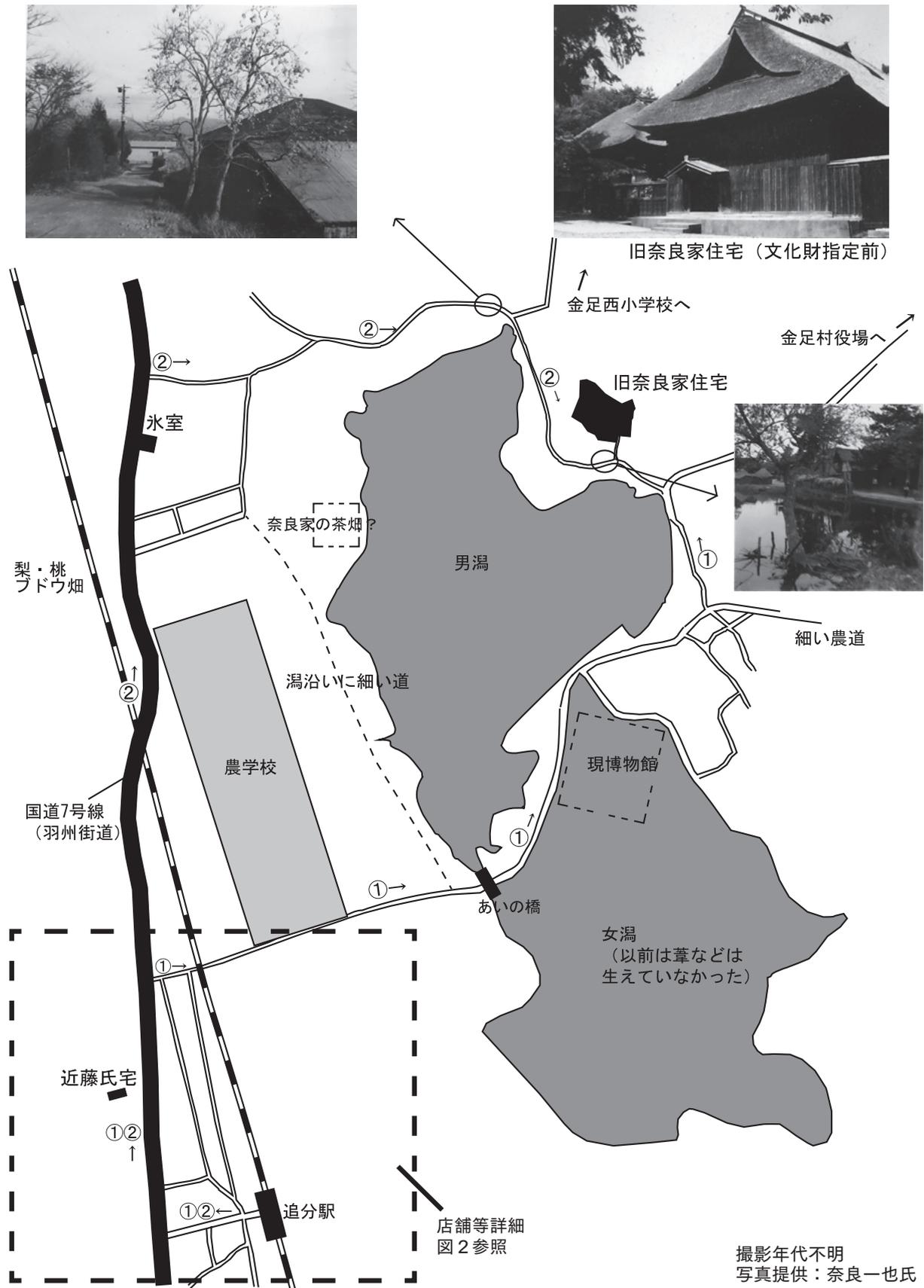
近藤家から奈良家までの道のりは、主に①と②のルートが考えられる。①は秋田県立金足農業学校(現金足農業高等学校)の前を通る道で、奈良家方面へのメインストリートはこの道であった。「男湯の道を歩きながら」と勝平が記していることから<sup>(13)</sup>、①を通った可能性が高い。タウトは松並木の匂いや湖から東プロイセンの故郷を思い、後に『草園』にもそうした原稿を寄せている<sup>(14)</sup>。

この後一行は奈良家を見学する。この時当主(奈良磐松)は不在で(事前に連絡をしていたにも関わらず。しかも重い写真機を抱えて砂地を歩いて疲労していたが、茶を一杯くれただけだったとタウトの記述は続く)、若主人が屋敷中を見せてくれ、写真撮影を許してくれた。タウトの記録では、奈良家には古い家屋に建て増したハイカラな建物が建っており、納屋や土蔵などの附属建物が複数ある。床の間には谷文晁の軸が掛けてあったことなどが書かれている。

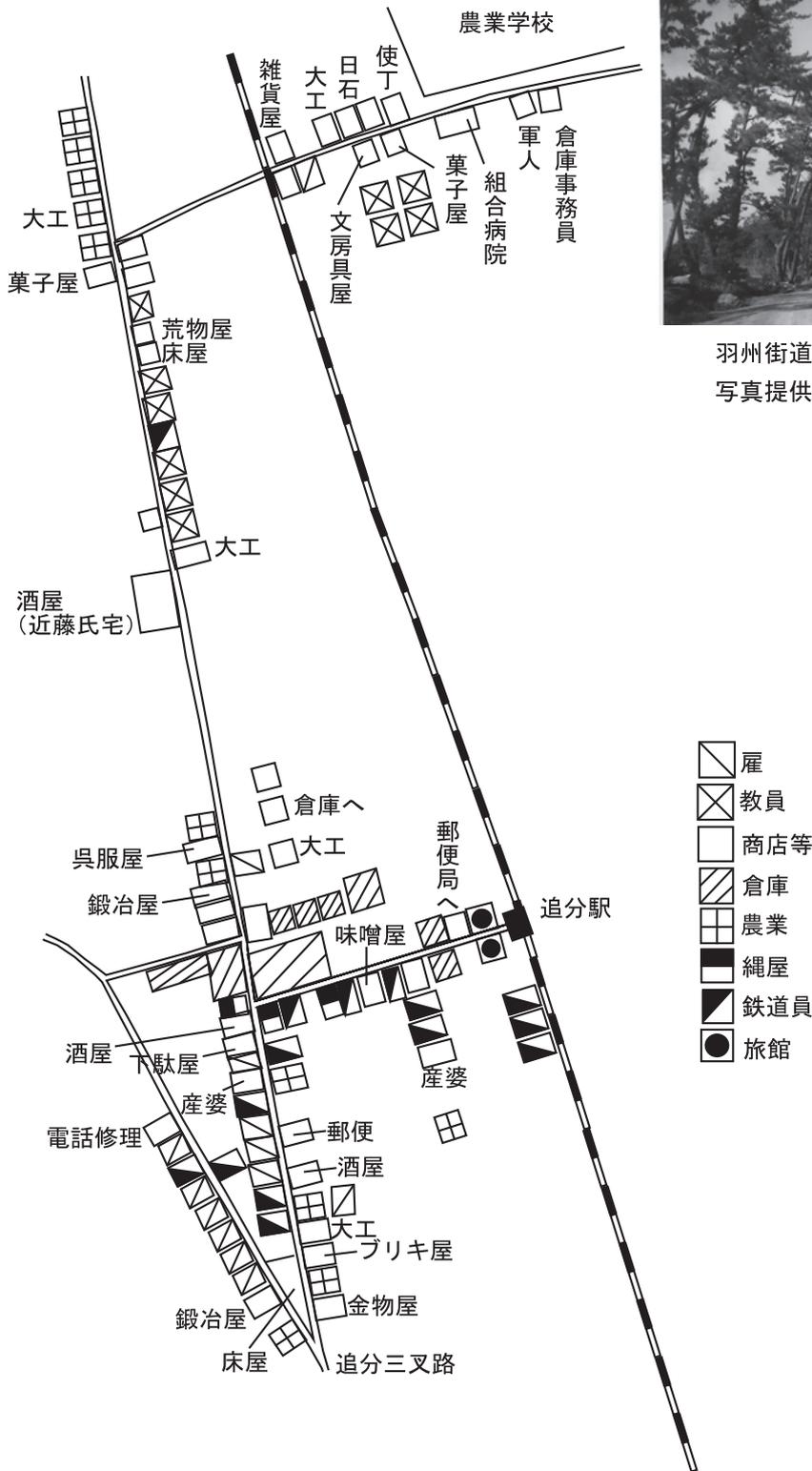
奈良家住宅は、1965年に重要文化財に指定された後に大規模修理を行っており、現在では増築されたハイカラな建物などは残っていない。文化財指定前の奈良家の敷地図および間取り図については図4・5を参照されたい。タウトが滞在したと言われている「ねま」は、屋敷の南東に位置する部屋で、当初は寝室であったが、後に座敷に改められ、客間として用いられていた。部屋をくまなく見たタウトが、大黒柱やそら窓、建築木材を運んだ櫓の寸法を読み取ったことに驚いたと勝平は述べている<sup>(15)</sup>。この時タウトと上野が撮影した奈良家の写真は後に“HOUSES AND PEOPLE OF JAPAN”に掲載されたが、タウトにとっては奈良家の建築はあまり満足のいくものではなく、「普請は、様式の点から見てもあまりすぐれたものではない」という感想であった<sup>(16)</sup>。

3人は、「帰途には別路をとり」奈良家から追分駅へ向かった<sup>(17)</sup>。「松の香りは砂の中まで沁みこんで」おり、世にも美しい躑躅が深紅の花をつけていた。この躑躅は現在でも湯周辺で見ること

(図1) 追分地図



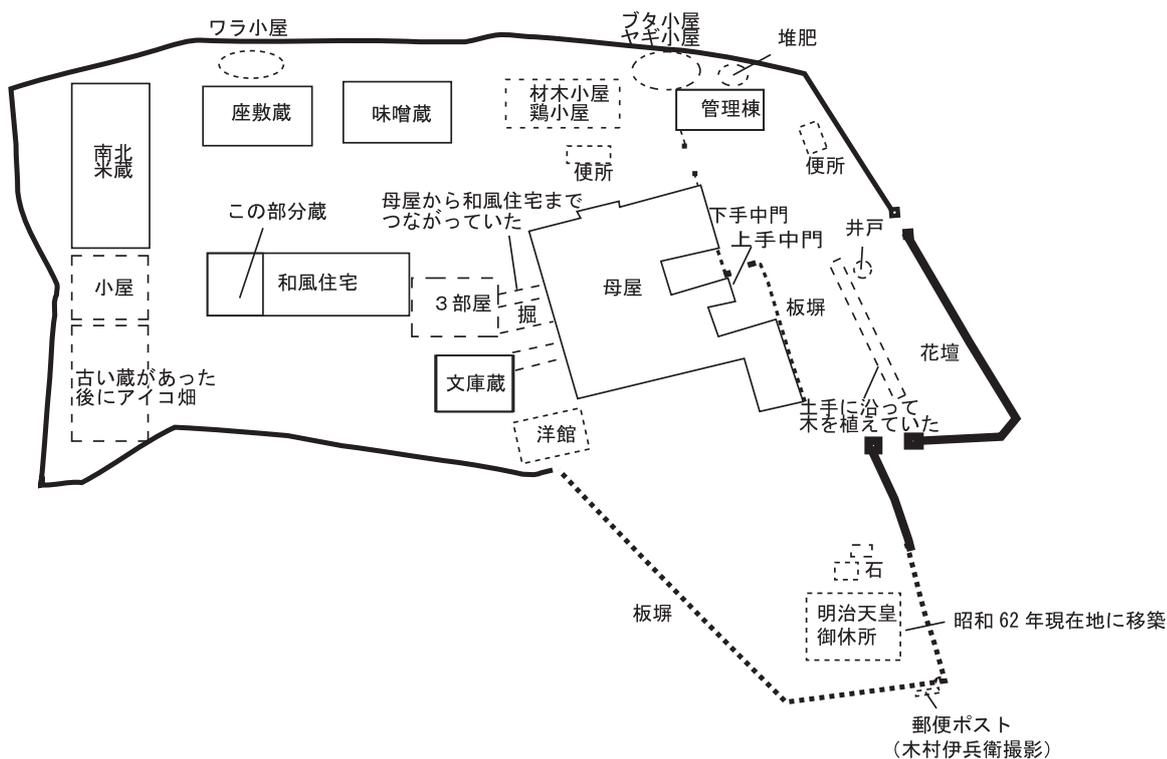
(図2) 追分駅周辺拡大図



羽州街道松並木 (場所・撮影年代不明)  
写真提供：奈良一也氏

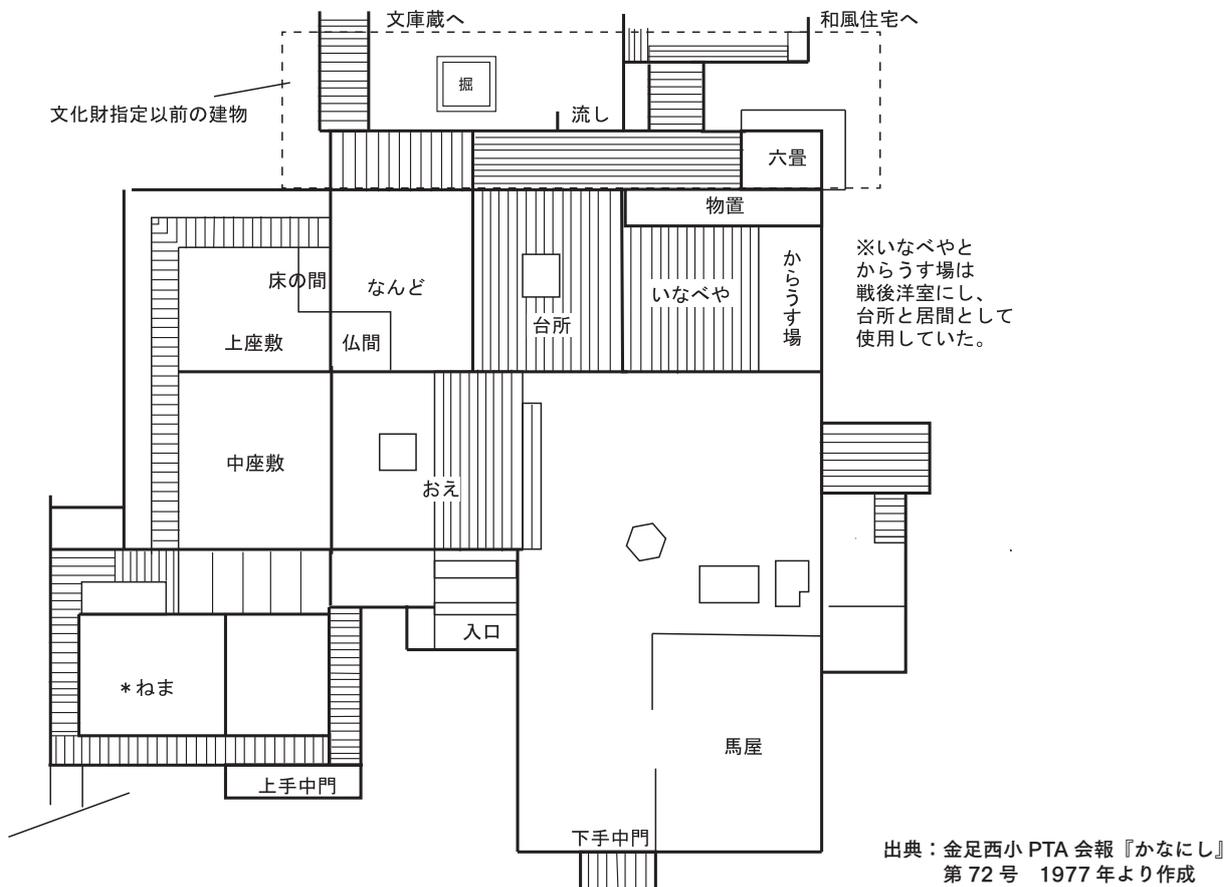
金足西尋常高等学校『金足村郷土誌第一輯』1934年より作成

(図4) 旧奈良屋敷地図

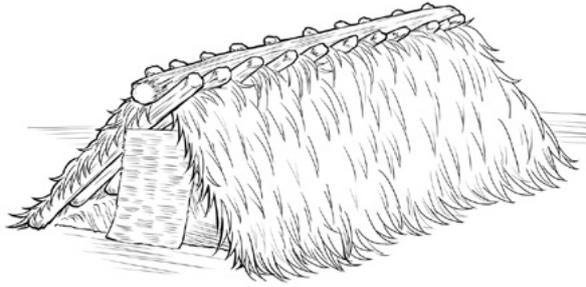


1990年代に元職員高橋正氏が故奈良岩雄氏より聞き取った内容をもとに作成

(図5) 奈良家屋内



出典：金足西小 PTA 会報『かなにし』  
第 72 号 1977 年より作成



(図3) 屋根がかかった氷室(当時のイメージ)



(写真1) 牛坂地区に残る氷室跡

ができる、ヤマツツジもしくはレンゲツツジであるという。

②の道を通ると、先述した氷室を見ることができ、行きと帰りにどちらの道を通ったかは推測でしかないが、「別路」という記述から、タウトらは①、②両方の道を通ったことは言えるだろう。そして勝平の記述から考えると、行きに①の道を通った可能性が高い。

近藤宅へ寄った後、午後の汽車でタウトらは青森に向かった。タウトは手帖のメモを見ながら「新しい友達、勝平さん、さよなら」と言い、勝平と握手をして別れた<sup>(18)</sup>。

### 3. 「冬の秋田」へ(1936年2月6日から2月11日)

#### 1) 次の旅までの経緯

突然のタウトと上野の来訪ではあったが、勝平は“HOUSES AND PEOPLE OF JAPAN”に口絵

を描くことになり、近藤は後日タウトと上野に『草園』への寄稿を依頼できたことが成果であったと言えるだろう。

この旅は『日本評論』1935年11月1日号、12月1日号に「飛騨から東日本」、1936年1月1日号に「奥の細道」と題して掲載され、秋田市の旅は12月1日号と翌年1月1日号に掲載されている。タウトの記述は詳細に及び、その日の出来事や風景が克明に記されている。

5月25日の日記の中で、タウトは勝平の雪景色の版画に関心を持ち、また金谷旅館の若い女中にも勧められて、冬の秋田がみたいと思った。それが県南の小正月行事を見る旅へとつながるのであるが、旅の直前まで実現されるかどうか分からないものであった。

秋田市立赤れんが郷土館に残されているブルーノ・タウトの勝平得之宛ての書簡(上野伊三郎訳)から、次の秋田への旅までを時系列で整理してみる。

「小林山 11月2日」付のタウトからの手紙には、『日本評論』に勝平のことを温かい気持ちで紹介したこと、旅の途中で依頼したタウトの著書の口絵を勝平に依頼することが正式に決まったこと、口絵のサイズなどの具体的な指示もあり、至急スケッチを送って欲しいことが書かれている。

11月6日付上野伊三郎からの手紙には、タウトから『草園』の原稿を預かっているものの多忙のため翻訳できず、近日中には送るということ、また、雪の季節に秋田を訪れたいということが書かれている。

11月22日三省堂書店の便箋にブルーノ・タウトの名義で書かれた書簡には、勝平のスケッチを受け取った礼と、スケッチの手直しを依頼する内容が記されている。勝平は約3週間で挿絵のスケッチを送り、実際に版を起すまで「タウトさんの原訳二葉入りの手紙を頻繁に」もらっていたらしい。「2,000枚の手刷版画は、私のからだには重すぎる労働であったが」、2ヶ月余りで完成させて版元へ送ったという<sup>(19)</sup>。

版画の制作に奔走していた勝平のもとに、タウトと上野の連名の手紙が届いた。そこには2月6

日に4～5日の予定で秋田を訪れたいこと、については旅館などの手配をして欲しいことが書かれていた。タウトの手紙の日付は1936年1月12日であるが、上野の手紙の日付は1月20日であり、この日以降に勝平は旅の行程を組み、かつ旅館の手配などを行ったことになる。

勝平のスケッチブックに、旅の日程や旅館名、世話人などが記された箇所がある。横手、六郷、大曲の小正月行事を見学し、その後秋田市へ向かうという強行軍であったが、勝平の友人達の尽力により、この旅はタウトや上野にとって大変満足のいくものであったし、秋田の冬の風俗に存分に触れられたものであった。

## 2) タウトの「秋田批判」

この2度目の秋田旅行が実施される直前に、前回の旅の関係者を動揺させる出来事があった。

1936年1月9日付秋田魁新報の朝刊一面「一日一話」で、『日本評論』にタウトが記した秋田県知事と、奈良家当主の対応についての批判記事が掲載された。記事はごく短いものであったが、一面に掲載されたことで多くの目にとまったと思われる。

それを受けて2月4日、秋田魁新報朝刊一面「読者の声」に、1月9日の記事への反論が掲載された。投書は奈良環之助(1891-1970)である。環之助は奈良家の関係者であり、『草園』同人でもある。1月の新聞記事を知った後「(奈良家の)案内人は気が利かな過ぎる自分が居つたならば」と悔いていたという<sup>(20)</sup>。そこで環之助は、事実関係を知事と奈良家関係者とに確認した。そして秋田県知事からは、確かに群馬県知事からの紹介状を受け取ったものの、それは私用であると思っていたし、当日は他の要件があったのでタウトに会えなかったということ、奈良家の若い当主からは、タウトらから「かまわないで欲しい」と言われたため紅茶だけを出し、建物を自由に見てもらった、ということを取り上げたという内容のものだった。

このことについてタウトは「冬の秋田」(『文芸春秋』掲載時は「雪の秋田」)の中で、「しかし、それなら日本は客を厚遇したがるのだろうか」と記しており<sup>(21)</sup>、納得はしていないよう

ある。

魁新報の一連の記事がどれほどの影響を与えたかどうかは定かではないが、環之助の記事から数日後に来秋したタウトの2度目の旅の様子は、魁新報紙面で大々的に取り上げられた。

ここからはタウトが出会った人々を中心に、冬の旅の行程について整理したい。

## 3) 「冬の秋田」の旅に関与した人々

奈良環之助の投書から2日後に再び秋田を訪れたタウトは、多くの案内人によってさまざまな小正月行事、秋田の冬の風俗を見ることが出来た。これには勝平の尽力が非常に大きい。

勝平のメモや「冬の秋田」の記述から、旅程ならびに関わりのあった人々を挙げたものが表1である。

2月6日に勝平とタウトは湯沢で落ち合うはずであったが、手紙の行き違いで勝平は湯沢駅に、タウトと上野は秋田駅に降り立った。タウトらは勝平の父親と妻、友人の池田貞治(駅員)に迎えられ、前回と同様金谷旅館に宿泊する。勝平とタウトらは2月7日午前、横手駅で再会した。

この日はかなりの強行軍で、一行は横手のカマクラを見た後六郷の竹打ちに行き、馬櫓で綱引きが行われる大曲に移動。翌午前0時前に大曲に到着している。この短期間で小正月行事を見てまわるために、周到な計画をたてたことが分かる<sup>(22)</sup>。

タウトは特に横手のカマクラについて「これほど美しいものを私は曾つて見たこともなければ、また予期もしていなかった」と記している<sup>(23)</sup>。

大曲到着後、綱引きが開始されるまでタウトらは「ハイカラなカフェ」(枕流館<sup>ちんりゅうかん</sup>)に留まり、そこで出会った渡辺賢郎(賢次郎 ※当時東京日日新聞通信員)からさまざまな古美術品などを見せてもらっている<sup>(24)</sup>。枕流館は旅館ではあるものの、大曲の文人の集まるサロンのような場所であった。この夜、丸子橋から見た景色に感動したことが「冬の秋田」に書かれており<sup>(25)</sup>、現在丸子橋にはタウトの記念碑が建てられている(写真2)。

1936年2月12日付のタウトから渡辺宛の礼状が残されている<sup>(26)</sup>。手紙は滞在中の礼を述べるとともに、次のような文章で結んでいる。



(写真2) 丸子橋にあるタウトの記念碑

「困難なる今日なれど、日本が新文化を創造する時の来るや必せりと存じ候。敬白」。

この一文から、タウトが日本文化の開拓に期待を寄せていたことがうかがえる。

#### 4) 新聞記事から

この旅については1936年2月9日『秋田魁新報』夕刊2面や、2月11日の夕刊2面などたびたび掲載された。タウトの記録の中には、2月7日、平源旅館で3人の記者から取材を受け、秋田県知事と奈良家の問題について問われたとあるが、この時の取材が2月9日の記事になったと思われる<sup>(27)</sup>。

当時大曲図書館長であった田口松圃(本名:謙蔵 1883-1956、『草園』にもしばしば寄稿している)の日記にも、タウトのことが触れられている。

2月7日。この日は晴れて凍るほど寒かった。

「四時半出で社(注:仙北新報社か?)によりしに今夜の綱引ニハ独乙人(注:タウトのことか?)来ると、六郷のカマクラを見て後一小原記者に何かタネをとるやうにすゝむ。但し気のりせず。若い時はセンキョなど、とかく面白きもの(抜粋)<sup>(28)</sup>」

田口はこの日来客などで多忙な日を過ごし、「ふ(と?)綱引の聲ニ目さめしに十二時也」と結ばれている。タウトが大曲を訪れた頃、田口は既に就寝していた。仙北新報が残されていないため、不明であるが、恐らくタウトの来秋については記事にならなかったのだろう。

それに対して『秋田魁新報』には2月13日と14日に「タウト氏に聴く」という記事を2回連続で掲載している。執筆者は記者の中島耕一で、2月9日に秋田市で行われた『草園』同人らとの会合でタウトが語った内容をまとめたものである<sup>(29)</sup>。ちなみに中島も『草園』同人である。

金谷旅館で行われた会には、タウトと上野の他、勝平、奈良環之助、近藤兵雄、武埴永之助、そして魁新報社から武埴三山(本名祐吉)、中島耕一が参加した。勝平のメモには「草園の話会」と書かれている。当時魁新報の整理部長であり、『草園』同人の武埴三山は、当初この会に参加する予定はなかったらしい。たまたまその日、汽車で近藤と奈良に出会い、参加することになったという。近藤と奈良は、タウトの誤解を解くためにわざわざ夜に追分から駆けつけたのだった<sup>(30)</sup>。

通訳をしていた上野が体調不良で席を外していたため、タウトは話の内容が分からず当初は不愉快であったようだが、上野が戻った後は話も進んだようで、何枚かの寄せ書きを皆で書いたりしている。

その夜の会で話題になったのは次のようなことであった。東北の家が冬の寒さを防ぐための工夫、馬籠の改良、今回見た行事の中でカマクラが最も気に入ったこと、モンペがすばらしい衣服であること、印象の良かった都市は新潟と秋田であること、などである。武埴三山はタウトから、東北の住居についての話を聞いたかったが「住宅は生活と深い関係を持つてゐるから、東北住民の生活を根本的に研究した後でなければ云はれない」とどうしても語らず、物足りなさを感じたという。後日タウトは「秋田に於て関心したのは四つある。勝平氏の絵と秋田料理とお菓子となんとかである(勝平の記憶では建築と酒と食べものと版画)」と言ったというが、このことについても武埴自身は、版画はともかく、タウトの専門外である「料理や菓子についての即興的な感興に同意」することはできなかつたようであった。

秋田の旅の最中に述べたタウトの感想は、新鮮で率直なものであり、後に執筆された「冬の秋田」にも魁新報の記事をより深めた内容が書かれている。『草園』同人が開催したこの会は、前回の旅

の誤解を解く意味もあったが、それ以上にタウトの率直な意見を聞き、秋田の印象や文化についての感想をいち早く活字にしたことは意義深いといえる。

#### 4. 『草園』同人との関わり

##### 1) 『草園』について

ここで『草園』という雑誌について触れたい。

『草園』は、当初は随筆を中心としたもので、1935年4月1日に第1号が刊行された。きっかけは秋田市追分の酒造会社社長近藤兵雄（萍悠）が、秋田市金足西小学校教諭であり、歌人でもあった石田玲水（1908-1979）に、「のんびりした随筆雑誌を」作りたいと持ちかけたもので、発行人は石田玲水である<sup>(31)</sup>。第1号の執筆者は近藤兵雄、石田玲水、奈良環之助、相場信太郎（野蕪）ら10数名におよぶ。その後もほぼ一月ごとに刊行されたが、1936年7月25日で休刊。しかしながら復刊の要望が高く、翌1937年6月12日号には「第二次草園」として復活する。太平洋戦争中も細々とではあるが刊行された。『草園』は1954年に『叢』、1958年に『叢園』と誌名と変え、2005年の171号まで続いた秋田県の代表的な随筆誌といえる<sup>(32)</sup>。

タウトが追分を訪れたのは、『草園』第1号が刊行された一ヶ月後であり、近藤は創刊したばかりの『草園』をタウトらに贈呈したことになる。当初は「何とか一二年は続けて行きたい」と考えていた雑誌<sup>(33)</sup>へ、初対面の、しかも外国人であった人物に寄稿を依頼したこの決断が、この後草園同人とタウトとを結びつけるきっかけとなったとは、この時は近藤自身も想像がつかなかったであろう。

##### 2) 『草園』がもたらしたつながり

タウトの原稿は1935年5月の旅から約1ヶ月後の6月17日に書かれ、上野に託された。上野が多忙であったため翻訳が遅くなり、実際に『草園』に掲載されたのは翌1936年1月1日の第10号で、タウトの「追分の印象」は巻頭を飾った。なお、この号から勝平が表紙を担当している。タ

ウトの原稿を掲載することになった経緯については同号で近藤が「タウト氏来訪」という文章を載せている。近藤が原稿を書いた時には『日本評論』のタウトの記述は見えていなかったと思われ「この北欧の偉い藝術家の目に我が秋田の風物が如何に映ったか、大なる興味をもって期待して」いたが<sup>(34)</sup>、新年早々話題にのぼったのが、秋田県知事と奈良家主人の対応であったとしたら、近藤や『草園』同人らの失望はいかばかりであったろうか。

『草園』2月10日号には「タウト氏のこと」という短い記事の中で、タウトが近日中に来秋する機会があること、「膝つき合せて話合へるやうな機会があればよいがと、草園同人達がひそかに期待してゐる」と結ばれている<sup>(35)</sup>。短い秋田滞在中で、県南の小正月行事を見た後、再度秋田市に戻り、わずかな時間でもタウトとの会を持つことは、草園同人の悲願でもあっただろう。

この秋田の旅については1936年3月10日に武埴と上野が、1937年6月12日に近藤が『草園』に文章を寄せている。「冬の秋田」の旅をした年にタウトは日本を去ったが、その後の『草園』でもしばしばタウトの話題が語られる。

その後時代は戦争へ向かい、言論の自由が奪われていく。『草園』も厳しい状況下で、時に休刊を余儀なくされつつも、「郷土食特集」、「菅江真澄特集」、「平田篤胤特集」などの特集号を組み、県内のみならず、武者小路実篤、中川一政、柳田国男、今和次郎など県外の専門家からの原稿を掲載し、精力的に活動していた。

『草園』の編集方針が垣間見える文章がある。1948年4月1日、『草園』の編集後記に「武者小路、中川両先生の原稿は特にお宅まで参上して御願ひ申し上げた原稿、今（和次郎）先生の原稿は丁度御来秋の途次、追分驛頭で厚かましくも御願ひ申した原稿」で、タウトならびに柳田国男の原稿とともに「草園御自慢の原稿である」とある<sup>(36)</sup>。タウトの原稿も当初は偶然手に入ったものであったが、その後タウトの関係者から寄稿してもらうきっかけとなった。それは『草園』同人が、良い原稿を得るために努力を惜しまなかったこと、「秋田の風物を見直して行かう、秋田の風景でも言葉

でも、もう少し理解することが必要である」という理念のもと<sup>(37)</sup>、妥協しない雑誌作りを目指したことが、『草園』が171号もの長きにわたって刊行を続けることができた要因であろう。

### 3) 勝平得之と『草園』同人

タウトは秋田の旅の案内人であった勝平得之(1904-1971)という人物について、「秋田風俗を深い愛をもって描きながら、芸術的発展をとげている郷土版画家である」<sup>(38)</sup>と紹介している。上野もまた「このエハガキ(勝平の版画)は曾て東京の知人が経営してゐる版畫荘で見た木版畫で(中略)その作品から放射されてゐる處の農民生活への至大の人間愛」に心を打たれたと記している<sup>(39)</sup>。勝平の知名度はタウトによって広まったとも考えられるが、それ以前に勝平の作品は既に秋田美術展や帝展などで知られており、タウトの訪れた前年の1934年にはフランスルーブル美術館パヴィヨン・ド・マルサンに「雪の街」、「店」を出品している。このことから、勝平の創作版画はタウト来秋以前から一定程度の知名度を得ていたと言えるだろう<sup>(40)</sup>。

「勝平さんは性格が地味な方で、積極的に自分を売るようなことはしなかった」人であったことは複数人が証言するところではあるが<sup>(41)</sup>、「草園(叢園)」同人の例会は楽しみにしていたという<sup>(42)</sup>。勝平がタウトを奈良家に案内した際、最初にたよったのは『草園』同人の近藤兵雄であった。実はこの時、石田玲水も同席しており<sup>(43)</sup>、偶然とはいえ、タウト来秋の際には『草園』同人が少なからず関わっていたことになる。

こうした縁は、タウトの著作の翻訳者であった篠田英雄(1897-1989)にまでつながっていく。1936年の秋田の旅の際に、タウトと上野、勝平らが送った寄せ書きの一枚が、篠田のもとにも届いた。タウトが日本海の粟島らしい絵を、勝平が箱櫃を描き、上野が「雪寒人温」と賛をよせたもので、この寄せ書きをきっかけに篠田は勝平と知りあい、文通を重ねた。1944年夏には篠田は三男を連れて秋田を訪れ、勝平の案内でタウトのたどった地をめぐるという<sup>(44)</sup>。タウトの死後、日本で書かれた著作については篠田が引き継ぎ、

“HOUSES AND PEOPLE OF JAPAN”の第三版でも勝平に挿絵1,000枚を依頼している<sup>(45)</sup>。

さらに篠田の次男である雄次郎(1928-1992)がドイツのケルン大学に留学した際、市の博物館から「日本民俗芸術の木版画は大きな賞賛をうけている」と言われたことを勝平に伝え、勝平が版画40枚を博物館に寄贈している<sup>(46)</sup>。篠田は『叢園』勝平得之特集号に「勝平さんの追憶」を寄稿しており、ここからもタウトと勝平、ならびに『叢園』がつながっていたことが分かる。

## 5. タウトが見た秋田

篠田英雄は、日本滞在中のタウトの研究姿勢について「建築のみならず絵画・彫刻・工芸に互る芸術一般に表現せられた日本美を、科学的・組織的に研究して、これを自己のうちに摂取消化することに努めた」と述べている<sup>(47)</sup>。『草園』の会で、武埴はタウトが秋田の建築をあまり話題にしなかったことに物足りなさを感じていたが、『秋田魁新報』紙上でタウトの率直な感想は、その後『日本美の再発見』ならびに『日本の家屋と生活』などの著作に結実されていく。

タウトが追分の地に故郷の東プロイセンの面影を見、女性や子供の服装にロシアの面影を感じた。そうした故郷への郷愁もあるだろうが、タウトが秋田に持った印象は概ね良好であった(ただし秋田市の工芸品については評価が低かった)。タウトは、秋田が京都と似た部分を持ちつつも、東北の風土に順応した町を形成していること、特に家屋の黒ずんだ用材は雪と調和して「すぐれた趣味と釣合感」を持っていることを指摘している<sup>(48)</sup>。タウトは日本家屋が夏向きの造りであることに疑問を持っていた。その答えを求め、短期間ではあったが、冬の秋田を旅したのである。そこで見た数々の行事や風俗などから、人々が冬を乗り切るための数々の工夫を見いだした。道路や交通手段、暖房設備などについては改良の余地があるとしつつも、無防備に外国の文化を取り入れることはせず、独自の発展を遂げて欲しいと期待した。

1939年に刊行された『日本美の再発見』は、時節を鑑み、政府批判につながるような部分は訳

されなかったが<sup>(49)</sup>、旅の記述の中で、当時の社会情勢について議論していた場面が垣間見られる<sup>(50)</sup>。

「とにかくこうして人々は秋田のことを心配した。その秋田はもう寝入りかけていた」<sup>(51)</sup>とタウトは「冬の秋田」に記している。その本意を知ることにはできないが、この先の不確実な状況下、秋田のみならず、日本が進むべき方向を人々が憂慮していたことがうかがえる。

タウトの秋田滞在はほんの数日にすぎなかったが、そこで出会った人に強烈な印象を残した。タウトは旅先で出会った人へ頻りに礼状を出しており、誕生したばかりの地方雑誌であった『草園』にも寄稿を惜しまなかった。

近藤兵雄は「後年、タウト氏が故国獨逸に歸ってから、何かの折にふれて東洋の一寒村を思ひ出し、このさゝやかな雑誌を取り出して眺める事もあれば、又一層面白いと思ふのである<sup>(52)</sup>」と『草園』に感想を寄せている。タウトが再び日本の地を踏むことはなく、残念ながらそうした機会を得られなかったが、草園同人にとって、タウトとの出会いは、『草園』が単なる随筆誌に留まらず、その後の刊行を続ける励みにもなったともいえるだろう。

## 結びにかえて

ブルーノ・タウトの秋田の旅について、現在残されている文献等から時系列的に整理を試みた。この旅には勝平得之の協力が大きかったことは以前から指摘されている<sup>(53)</sup>。勝平とタウトが初対面であったにもかかわらず友好的な関係を築けたのは、2人が秋田の風景や暮らしに対して共通の視点を持っていたことが一つの要因であるだろう。また勝平だけでなく、秋田の旅には、『草園』同人の協力があつたこと、タウトとの出会いが、その後の『草園』の活動を少なからず後押ししたことが分かった。

タウトが日本に滞在し、東北への旅を行った1930年代は太平洋戦争へ向かいつつあり、東北では凶作などが続く時代であった。その反面、民具や民俗学、民藝運動への関心が高まり、地方へ

の目が向けられていた時期であり<sup>(54)</sup>、秋田県内でも郷土史への関心が高まっていた時である。

創刊当初は小さな随筆誌であった『草園』は、その後県内外から分野を問わず、論考や随想、短歌俳句などを掲載し発展していく。

「僕たちのグループは単に草園一つに止つてゐることを欲しない。秋田の文化運動といふ方面にも何かの力になりたい」とあるように<sup>(55)</sup>、『草園』を刊行することは、社会情勢が不安定な中でも秋田の文化を知り、かつ活性化させたいという同人達の思いを感じさせるものである。

1935年に秋田市の追分で誕生した『草園』は、その後休刊の時期はあつたものの、70余年の長きにわたってジャンルを問わず、秋田の文化を紹介し続けた。その原動力の一つとして、創刊一ヶ月後に起こったブルーノ・タウトと上野伊三郎との偶然の出会いが挙げられるだろう。当初「のんびりした随筆誌」を志していた『草園』は、秋田の文化を探求するため活動の範囲を広げ、やがて県内外の研究者達らのネットワークを構築するきっかけを作っていく。こうした人々を繋ぐ役目を担った『草園』の存在は、秋田の郷土研究を考える上で意義深いものであるといえる。

今回はブルーノ・タウトが辿った追分の道と、『草園』同人とブルーノ・タウトとの出会いを中心に整理を試みた。今後は『草(叢)園』が、時代の変化の中で果たした役割について検討する必要があるだろう。また1930年代前後に秋田で刊行された数々の郷土誌や当時の郷土研究者達についても整理する必要がある。それらについては今後の課題としたい。

## 《謝辞》

本稿の執筆にあたり、近藤隆氏、佐藤広子氏、鈴木田鶴子氏、奈良一也氏、藤原正三氏、村井信洋氏には追分周辺の聞き取りなどについて御協力をいただいた。また秋田市立赤れんが郷土館、大仙市アーカイブス、大仙市立大曲図書館には貴重な資料を御提供いただいた。ここに深く感謝申し上げます。

## 注

- (1) 篠田英雄訳／沢良子編 『図説精読 日本美の再発見-タウトの見た日本-』岩波書店 2019年 243頁-245頁
- (2) 京都国立近代美術館 『京都国立近代美術館・所蔵作品目録Ⅶ 上野伊三郎+リチコレクション』2009年 30頁-37頁 41頁-47頁
- (3) 注1 187頁
- (4) 加藤隆子『勝平得之 創作版画の世界』秋田魁新報社 2021年、秋田県立近代美術館 『生誕100年 知られざる勝平得之 故郷をみつめる新しい眼』2004年など
- (5) 勝平得之 「秋田に於けるタウトさん」『勝平得之の軌跡 第1集』勝平得之ファンクラブ 2014年 5頁
- (6) 「タウト氏に聴く(上) 中島耕一」『秋田魁新報』1936年2月13日夕刊3面
- (7) 注5 6頁
- (8) 「ブルーノ・タウトと秋田 近藤兵雄」『秋田魁新報』1958年11月12日夕刊4面
- (9) 注5 7頁
- (10) 近藤萍悠 「タウト氏来訪」『草園』1936年1月1日号 28頁  
この松並木は、戦時中松根油を採るために伐採されたため、現在はその面影を辿ることはできない(近藤兵雄『へそまがり』叢園社1965年 158頁)
- (11) 注1 128頁
- (12) 注1 209頁
- (13) 注5 7頁
- (14) ブルーノ・タウト「追分の印象」『草園』1936年1月1日号 2頁-4頁
- (15) 注5 7頁
- (16) 注1 129頁
- (17) 注1 130頁 『日本評論』に掲載された当初は「前の道を通った」とあるが、1939年刊行の『日本美の再発見』岩波新書からは「帰途は別の道を通った」となっている(84頁)
- (18) 注5 8頁
- (19) 『秋田県人雑誌』1936年1月1日号 42頁、注5 8頁
- (20) 武埜三山「タウト氏の印象」『草園』1936年3月10日 4頁
- (21) 注1 146頁
- (22) 『日本美の再発見』の中にも、横手駅で駅長が駅員が案内人につけてくれたこと、友人の平野勝氏らが同行してくれたことなどが書かれている(注1 149頁)。
- (23) 注1 149頁
- (24) 注1 153頁
- (25) 渡辺賢次郎「ブルーノ・タウトの建碑によせて」『秋田民報』1975年3月18日 4面 大仙市立大曲図書館所蔵
- (26) 今回は大仙市立大曲図書館所蔵の書簡のコピーを確認し、「枕流館物語」は大仙市アーカイブスのデータを確認した。
- (27) 「建築界の権威 ブルーノ教授雪の秋田を視察 紺の着物はよいが洋服は困りものですねーと」『秋田魁新報』1936年2月9日 夕刊2面
- (28) 田口松圃家資料「日記(昭和11年)」大仙市アーカイブス所蔵  
なおこの年、第19回衆議院議員選挙(1936年2月20日投票)が実施されている。
- (29) 「タウト氏来秋 各地行事視察」『秋田魁新報』1936年2月11日 夕刊2面  
中島耕一「タウト氏に聴く(上)」『秋田魁新報』1936年2月13日 夕刊3面  
中島耕一「タウト氏に聴く(下)」『秋田魁新報』1936年2月14日 夕刊5面
- (30) 注20 4頁
- (31) 『草園』1935年4月1日 第1号 31頁、編集後記等
- (32) 加藤隆子『勝平得之 創作版画の世界』秋田魁新報社 2021年 80頁-81頁
- (33) 注31
- (34) 注10 29頁
- (35) 「タウト氏のこと」『草園』1936年2月10日 16頁
- (36) 『草園』1948年4月1日 編集後記
- (37) 「草園についての二、三」『草園』昭和12年6月12日号 7頁
- (38) 注1 160頁
- (39) 上野伊三郎「至道無難、唯嫌揀擇」『草園』1936年3月10日 5頁
- (40) 秋田県立近代美術館 『知られざる勝平得之 故郷をみつめる新しい眼』2004年 93頁-94頁

- (41) 相場信太郎「風俗版画の詩人 勝平得之氏をいたむ」『叢園』1971年4月30日 11頁
- (42) 勝平良治「私の知っている得之」『勝平得之の軌跡 第1集』勝平得之ファンクラブ2014年 55頁
- (43) 「追悼座談 勝平得之を語る」『叢園』1971年4月30日 18頁
- (44) 篠田英雄「勝平さんの追憶」『叢園』1971年4月30日 27頁  
なお、この中には日本でのタウトの直弟子であるとされる水原徳言が終戦間際に招集され、土崎で軍務についていた際、勝平を訪ねていたという記述もある。
- (45) 「再び巻頭飾る版画－タウト氏の遺著に勝平氏－秋田を通して日本紹介へ」『秋田読売』1957年5月3日。
- (46) 「秋田風俗画西ドイツへ」『秋田読売』1952年10月25日、ほかに「勝平氏の版画40枚－ケルン博物館に保存」『秋田魁新報』1952年10月23日朝刊4面にも同様の記事がある。
- (47) 篠田英雄「ブルーノ・タウト氏の思出一初版あとかき一」『精読 日本美の再発見－タウトの見た日本－』194頁（初出1939年）
- (48) ブルーノ・タウト『日本の家屋と生活』春秋社2008年 129頁
- (49) 注1 210頁、沢良子「タウトの旅断章『人生も何もかも、すべては旅である』」『東北へのまなざし1930-1945』2022年 204頁-205頁
- (50) 注1「大曲の渡辺氏は、移民をしたらと言ったけれども、しかし何処へ移住しようというのだろう」（159頁）「（かおる堂）の主人は、ただ『勝った、勝った！』とばかり教え込む学校の教育方針がよくなかった」といっていた」（159頁）、「（武埴三山）氏とても、これからさき何時まで勇気を示すことができるだろうか」（161頁）など。
- (51) 注1 159頁
- (52) 注10 30頁
- (53) タウトの記述他、近藤兵雄『へそまがり』1965年 叢園社162頁など
- (54) 掘宣雄「いまだ見ぬ東北へ」『東北へのまなざし1930-1945』展示図録2022年 10頁  
こうした時代背景と、東北の文化について紹介す

る展示が近年開催されている。2020年には、秋田公立美術大学ギャラリー BIYONG POINT で「アウト・オブ・民藝 | 秋田雪橇編 タウトと勝平」展が、2022年には岩手県立美術館・福島県立美術館・東京ステーションギャラリーで「東北へのまなざし1930-1945」が開催された。いずれもタウトだけでなく、さまざまな視点から東北の風俗に注目した人々を多元的に紹介しており、改めて東北が生み出した生活用具や民芸品についての捉え方を考えさせられるものであった。

- (55) 『叢園』夏季特別号 1935年8月6日 編集後記

表1 タウト冬の旅に関わった人々

日付(新暦)	日付(旧暦)	時間	市町村名	出来事	勝平得之とタウトの記録にあった人物名
2月5日	旧1月13日		湯沢(横手)	勝平、湯沢着	池田貞治(行事や汽車の時間を調べてくれた) 吉田三益、善吉、益子浩(夕食を馳走になる) 山口久太郎 帯久 下阿部行雄(十文字)、柴田貞(真か?)市、佐々木義人
2月6日	旧1月14日		湯沢	勝平、湯沢滞在	
2月6日	旧1月14日	21:20	秋田	タウト秋田駅着 勝平の父と妻が出迎える	勝平為吉、勝平晴、池田貞治(駅員)
2月7日	旧1月15日	9:16	横手	勝平横手着 タウトと合流	
2月7日	旧1月15日		横手	横手町散策	根本家隆、石村重太郎、小西秀蔵、小西理兵衛 平野勝(案内人) ※横手・六郷で関わった人々
2月7日	旧1月15日	昼	横手	平源支店で昼食。3人の記者から取材を受ける	
2月7日	旧1月15日	18:00	横手	横手 カマクラ見学(平源旅館)	
2月7日	旧1月15日	22:00	美郷町六郷	六郷 竹打見学(小西旅館)	
2月7日	旧1月15日	23:00	大仙市大曲	大曲着(大曲ホテル)	
2月8日	旧1月16日	0:00	大仙市大曲	枕流館食堂水月で休憩	六澤栄太郎、渡辺賢(次)郎(水月で案内)
2月8日	旧1月16日	3:00	大仙市大曲	綱引き見学	
2月8日	旧1月16日	4:30	大仙市大曲	仙北ホテル(仙北クラブ)	
2月8日	旧1月16日	午後	秋田市	金谷旅館 寄せ書きを関係者に送る	
2月8日	旧1月16日	18:25	秋田市	秋田 放送局でナマハゲの映像を見る	
2月9日	旧1月17日	10:00	秋田市	秋田 太平山三吉神社梵天見学	
2月9日	旧1月17日	正午	秋田市	秋田 キリタンポ馳走	
2月9日	旧1月17日	夕方	秋田市	秋田 草園の話し会(9時-1030)	武埴三山、近藤兵雄(萍悠)、奈良環之助、武埴永之助、中島耕一、勝平得之
2月10日	旧1月18日	10:30	秋田市	竹谷金銀細工、工藤染物店、紋書、本荘指物店 加納塗物店、荻原指物店、熊谷竹屋 勝平中食 かをる堂菓子店 保戸野周辺見学	
2月11日	旧1月19日	8:20		タウト離秋	勝平得之、武埴三山

『日本美の再発見』ならびに勝平のメモより作成